旭日、遥かなり８

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　　画　高荷義之
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目次

第一章　索敵機の戦い　9
第二章　蒼空の鉄槌（てっつい）　43
第三章　「天下分ケ目」　111
第四章　覇者が決まる日　129
第五章　瓦解のとき　207
終　章　239
あとがき　251

150°E
180°
150°W
30°N
0°
30°S
太平洋
日本
横須賀
呉
ウェーク島
サイパン島
マリアナ諸島
グアム島
パラオ
マーシャル諸島
メジュロ環礁
クェゼリン環礁
トラック環礁
タラワ環礁
ギルバート諸島
ナウル島
ハワイ諸島
オアフ島
真珠湾
ハワイ島
オーストラリア

ユーラシア大陸周辺図
30°E
60°E
90°E
120°E
エカテリンブルグ
クラスノヤルスク
レニングラード
モスクワ
ノボシビルスク
イルクーツク
バイカル湖
オムスク
スターリングラード
アストラハン
カスピ海
バクー
テヘラン
バンダルアンザリ
バンダルシャプール
ペルシャ湾
アラビア海
0°
インド洋
30°S

旭日、遥かなり 8

第一章　索敵機の戦い

1

発艦してからさほど時間が経たぬうちに、四隻の巨艦を中心に据えた輪型陣が視界に入って来た。
新鋭戦艦を中核とする第五四任務部隊だ。
第五八・二任務群との距離は、約八〇浬。航空機にとっては、近距離と言っていい。
「どこだ、ジャップは？」
「レンジャー」戦闘機隊の第六小隊長ヘンリー・クーパー中尉は、周囲を見渡した。
ＴＦ54各艦の対空レーダーが後方から接近する敵味方不明機を捉えたのは、現地時間の八時一四分。今より二〇分前だ。
足の速い新型偵察機「彩雲」であれば、ＴＦ54の上空に到達していてもおかしくない。
「『農場』より『番犬』、こそ泥は南に回った！」
レシーバーに「レンジャー」飛行長ニール・ストークス中佐の声が飛び込んだ。
敵機はＴＦ54の南側に迂回し、なお東進中だ。
ＴＦ54の東方に、空母がいると睨んでのことであろう。
「ガードドッグ1、了解！」
「ガードドッグ全機、俺に続け！」
クーパーはストークスに返答し、次いで部下に指示を送った。
操縦桿を倒し、左に大きく旋回した。
麾下三機のＦ６Ｆも、次々に機体を翻す。
クーパーはエンジン・スロットルをフルに開く。
離昇出力二〇〇〇馬力の空冷複列星型一八気筒エンジンが猛々しく咆哮し、Ｆ６Ｆが加速される。
たった一機とはいえ、逃がすわけにはいかない。
第五八任務部隊の位置を突き止められたら、日本機の大群が襲って来る。
昨日――九月七日のトラック攻撃で、多数の艦上機を消耗したＴＦ58には、敵の大規模な航空攻撃

を支えるのは困難だ。
敵機がＴＦ58を発見する前に捕捉し、墜とさなければならない。
「貴隊とシーフの距離一〇浬……八浬……」
ストークスが、こまめに情報を送って来る。
敵機の姿はまだ見えない。
視界に入るものは、広漠たる海面とところどころに浮かぶ断雲だけだ。
「ガードドッグ、敵は真下だ！」
ストークスの新たな指示が飛び込んだ。
クーパーは、操縦桿を右に倒した。Ｆ６Ｆが横転し、急降下に転じた。
降下角は六〇度。感覚的には、ほとんど垂直降下に等しい。
一万八〇〇〇フィート（約五四〇〇メートル）を指していた高度計の針が、反時計回りに回転し、海面がぐんぐん近づいて来る。
「いた！」
一万二〇〇〇フィートまで降りたとき、クーパーは東に向かって飛行する機体を見出した。
零戦よりも長く、ほっそりした胴体。前後に長い風防ガラス。主翼に描かれた赤い丸。
紛れもない日本軍の新型偵察機「彩雲」だ。
「ジミーは俺に続け。ダニーとエディは右だ！」
二、三、四番機に早口で指示を送りながら、クーパーは左に旋回した。
クーパー機と、ジミー・マッケイ少尉の二番機が敵機の左後方に回り、三、四番機は右後方に回る。
四機のＦ６Ｆが左右から、マイトのほっそりした機体を挟撃する。
クーパーの照準器が、マイトを捉えた。
「くたばれ！」
小さく叫ぶと同時に、機銃の発射ボタンを押したが、マイトの動きが僅かに早かった。
急加速し、Ｆ６Ｆを振り切りにかかったのだ。
クーパーが放った一二・七ミリ弾は、大気だけを

貫いている。

「追え！　逃がすな！」

部下に命じると同時に、クーパーは操縦桿を手前に引いた。

歯を食いしばりながら引き起こし時のGに耐え、水平飛行に移ったとき、マイトは完全に射程外へと脱していた。

距離はじりじりと開いてゆく。最大時速は、マイトの方が大きい。まっすぐ前に逃げられたら、F6Fでも追いつけない。

クーパーが破局を予感したとき、マイトの前上方から、おびただしい火箭が降り注いだ。青白いスコールの中に、マイトが自ら突っ込んでいったように見えた。

空中に火焔が湧き出し、マイトが一瞬でばらばらになった。薄い主翼が分断され、前後に長い風防ガラスも無数の屑と化して飛び散った。

クーパーの目の前に、たった今マイトを墜とした機体――「エンタープライズ」[1]戦闘機隊[6]に所属するF6Fが降下する。

彼らはVF13がマイトを取り逃がした場合に備え、TG58・2の手前で待機していたのだ。

「ガードドッグ1よりファーム。シーフは電波を出しましたか？」

「敵電波の受信報告は届いていない」

ストークスの答を聞いて、クーパーは安堵の息を漏らした。

F6Fは、任務を遂行したのだ。

ストークスが、新たな指示を送った。

「一旦、母艦に戻れ。二人目のシーフに備えねばならん」

2

日本帝国海軍第一機動艦隊は、トラック環礁の北方海上を通過しつつあった。

戦艦や重巡の艦橋からは、春島や水曜島が微かに見える。

マーシャル諸島の放棄前は、外地における最大の艦隊泊地として、連合艦隊の諸艦艇が多数停泊していたが、今は航空戦の最前線だ。

昨日、敵機動部隊との激しい航空戦によって大きな打撃を受けた地であり、「伊勢」「山城」の二戦艦が壮絶な最期を遂げた地でもあった。

「給油艦、反転します」

旗艦「大和」の艦橋に、見張員が報告を上げた。

第一機動艦隊隷下の各部隊は、この日の夜明け直後より、洋上給油を実施している。

タウィタウィ泊地からトラック沖までは、約一五〇〇浬の距離があるため、移動時に消費する燃料も多い。空母、戦艦、重巡は燃料に比較的余裕があるが、軽巡と駆逐艦は心許ない。

このため各艦は、航続距離を伸ばすため、ドラム缶、石油缶に詰めた重油を艦内の空所に搭載すると共に、洋上給油を実施して、移動中の航海で消費した燃料を補給したのだ。

「給油艦に信号。『深謝ス。航海ノ無事ヲ祈ル』」

第一機動艦隊と第三艦隊の司令長官を兼任する角田覚治中将が命じた。

「大和」からの信号に対し、給油艦から「健闘ヲ祈ル」との返信が届く。

任務を終えた給油艦と一機艦の距離が、みるみる離れてゆく。

「索敵機からの第二報は届かぬか？」

「残念ですが、墜とされた可能性大です」

角田の問いに、航空甲参謀の高橋赫一中佐が重苦しい表情で答えた。

今より三〇分前、「大和」の通信室に、一通の報告電が届いた。

第一一航空艦隊隷下の索敵機が送ったもので、

「敵艦隊見ユ。位置、『春島』ヨリノ方位九〇度、一八〇浬。戦艦四、巡洋艦三、駆逐艦多数。空母ヲ

伴ワズ。索敵ヲ続行ス。〇七三一（現地時間八時三二分）」

と伝えていた。

電文を受けた司令部は色めき立った。

水上砲戦部隊が発見された以上、空母を含む機動部隊が、必ず近くにいるはずだ。

一機艦司令部では、発見された敵艦隊に「1イ」の呼称を定め、続報を待った。

ところが予想に反し、第二の報告電はなかった。

索敵機は、三〇分以上も沈黙したままだ。

遺憾ながら高橋の言う通り、索敵機は撃墜されたと判断せざるを得なかった。

「『1イ』の近くに空母がいるのは、間違いないのですが――」

作戦参謀の長井純隆中佐が言い、ちらと艦外に視線を投げた。

現在一機艦は、「甲」「乙」「丙」「丁」の四部隊に分かれ、互いに三〇浬から四〇浬の距離を置いて進撃している。

丁部隊、すなわち重巡を中心に編制された第二艦隊が先陣を切り、その後方四〇浬を角田が直率する丙部隊が進撃している。

機動部隊の中核兵力となる甲、乙両部隊の位置は、丙部隊の西北西と西南西。丙部隊との距離は、どちらも三〇浬だ。

一機艦の全空母は、夜明け前までに攻撃隊の出撃準備を整え、格納甲板に待機させている。

発艦は、一時間以内に可能だが――。

「我が隊の索敵機はどうなっている？」

角田は聞いた。

一機艦も、六時三〇分（現地時間七時三〇分）と七時三〇分の二度に分けて、索敵機を放っている。およそ一時間半が経過したが、報告電はない。

「一一航艦の索敵機同様、敵機に墜とされた可能性が危惧されます。米軍も空母の位置を秘匿すべく、腐心しているのかもしれません」

顔を曇らせた高橋に続いて、参謀長の柳本柳作少将が具申した。

「選択肢は二つあります。索敵機の報告を待つか、索敵攻撃に踏み切るかです」

「索敵攻撃か……」

角田は、柳本の言葉を繰り返した。

攻撃隊に自ら敵艦隊を捜索させ、攻撃させる戦術だ。角田が空母部隊の指揮官に任じられてから二年以上経つが、そのような戦術は使ったことがない。

開戦時の機動部隊指揮官だった南雲忠一中将も、先代の第三艦隊司令長官小沢治三郎中将も、索敵攻撃を用いた例は皆無だ。

「諸官はどうかね？」

角田は幕僚たちの意見を求めた。

二年前、機動部隊の指揮官になったばかりの頃であれば、柳本の具申を受け容れたかもしれないが、角田も航空戦の経験を積み、索敵情報の重要性を理解している。

猪突猛進は禁物だ。慎重に振る舞わねば――と、自身に言い聞かせた。

高橋が、真っ先に発言した。

「甲参謀としては、賛成できかねます。理由は二つあります。第一に、敵機動部隊を発見できなかった場合、攻撃隊は帰還前に爆弾と魚雷を投棄しなければなりません。何十発もの爆弾と魚雷を無為に失うことになれば、肝心なときに弾切れとなる危険があります。第二に、敵艦隊の捜索に時間を費やした場合、敵の直衛機との交戦時間も長くなり、被撃墜機が増大します。必然的に攻撃力は低下し、敵空母を撃滅できる可能性も小さくなります。攻撃を成功させるためには、敵の直衛機との交戦時間を、可能な限り短くしなければなりません」

「乙参謀の意見は？」

角田は、航空乙参謀の吉岡忠一少佐に視線を向けた。

開戦時から一貫して、機動部隊の航空乙参謀を務

めている古株だ。

経歴から考えれば、甲参謀に任じられてもおかしくないが、甲参謀の補佐役を務め続けている。

「私も、索敵攻撃には反対です。敵機動部隊の位置を突き止めぬまま攻撃隊を出すのは、危険が大きいと考えます」

「『1イ』を叩くというのはいかがでしょうか？今のうちに敵戦艦を一、二隻沈めておけば、予想される艦隊戦で我が方が優位に立てます」

首席参謀大前敏一大佐の具申に、高橋が反対した。

「優先順位は、あくまで空母に置くべきです」

「肝心の空母は、今のところ未発見だ。叩ける目標を、まず叩くべきではないか？」

「心情的には、首席参謀の主張に賛成したいところだな」

角田が大前と高橋の間に割って入り、幕僚たちに微笑して見せた。

「敵の新鋭戦艦を叩きのめし、『伊勢』と『山城』の仇を取ってやりたい。しかし作戦全体のことを考えれば、『1イ』には手を出せん。それに『伊勢』と『山城』の仇討ちは、航空攻撃よりも、戦艦同士の砲戦でやりたい」

「索敵攻撃は実施せず。『1イ』についても静観するということでよろしいですね？」

確認を求めた柳本に、角田は専門の砲術に喩えて答えた。

「所在不明の敵機動部隊に攻撃隊を向かわせるのは、未発見の敵艦に主砲を撃つようなものだからな」

長井作戦参謀が一歩進み出、新たな意見を具申した。

「索敵を、もう少し強化してはいかがでしょうか？『1イ』の近くに索敵機を向かわせ、周囲を捜索すれば、敵機動部隊は必ず発見できると考えます」

「作戦参謀の御意見に賛成ですが、索敵機が敵の電探にかかり、撃墜される可能性は高いと見るべきです。索敵機には、電探にかかり難いよう低空を飛行

するか、逆に高高度を飛行して、敵戦闘機に捕捉され難いようにするといった工夫が必要と考えます」

吉岡が、長井の意見に付け足した。

「いいだろう。甲、乙両部隊に彩雲を出すよう、命令電を送ってくれ」

角田は頷き、柳本に命じた。

新型艦偵の彩雲は配備数が少なく、丙部隊の空母には搭載されていない。

甲部隊の「大鳳」「翔鶴」「瑞鶴」に各三機、乙部隊の「蒼龍」「飛龍」「雲龍」に各二機、合計一五機が用意されているだけだ。

無線封止を破ることになるが、この際やむを得なかった。

「大和」の通信室から、甲、乙両部隊に向けて命令電が飛んだ直後、入れ替わるようにして、電測室から報告が上げられた。

「対空用電探、感二。本艦よりの方位八〇度、六〇浬！」

束の間、艦橋の空気が凍り付いた。

第三次ギルバート沖海戦の折り、敵に先手を取られ、序盤は防戦一方になったことは、まだ記憶に新しかった。

「艦長、敵機の高度は分かりますか？」

「電測、発見せる目標の高度報せ！」

高橋の問いを受け、「大和」艦長森下信衛大佐が、電測長岩見五郎大尉に聞いた。

「大和」は今回の作戦に先立ち、ドイツから導入した三一号電探を後部指揮所に装備している。目標との距離に加えて、高度まで探知できる優れものだ。

「もう少し近づかないと、高度は分かりません。反射波の大きさから、少数機と見積もられますが」

と、岩見は返答した。

「目標の方位や反射波から見て、クェゼリンのB24と思われます。トラックの状況を探るため、索敵用の機体を繰り出したのでしょう」

高橋が推測を述べ、それを受けて柳本が言った。

「B24であっても、脅威に変わりはありません。我が軍を発見され、敵機動部隊に位置を通報される危険があります」

「各隊に打電せよ。『千早城』発動」

角田は、落ち着いた声で下令した。

「千早城」とは、敵の先制攻撃を受けることが確実となった場合の作戦案だ。

「各空母は、使用可能な全戦闘機を飛行甲板に上げ、迎撃準備を整えよ」

との指示が含まれる。

「大和」の通信アンテナから命令電が飛ぶや、甲、乙、丙各部隊の空母は騒然となった。

格納甲板で出撃を待っていた零戦が、次々と飛行甲板に上げられ、暖機運転を開始する。

「大和」の艦橋からも、「隼鷹」以下五隻の飛行甲板で、整備員や甲板員が慌ただしく走り回り、飛行甲板上に零戦を敷き並べてゆく様子が望見される。

「敵機との距離三〇浬、高度八〇（八〇〇〇メートル）」

岩見電測長の新たな報告が届いたとき、角田は高橋の推測が正しかったことを悟った。

敵機動部隊の艦上機であれば、八〇〇〇メートルもの高高度から接近して来ることはない。

コンソリデーテッドB24〝リベレーター〟――トラック～マーシャル間の航空攻防戦が始まって以来、何度となくトラックを襲った四発重爆撃機であろう。

ほどなく、左前方上空に飛行機雲が見え始めた。

3

TF58司令官マーク・ミッチャー中将は、参謀長アラン・ガーフィールド少将以下の幕僚たちと共に、旗艦「レンジャー」の戦闘情報室に詰めていた。

この少し前、クェゼリンの第一五航空軍に所属するB24から送られた報告が、情報ボードに反映されている。

日本艦隊は四隊に分かれ、トラック環礁の沖を東進中だ。

水上砲戦部隊が前面に立ち、その後方四〇浬に機動部隊一群が、更にその後方に機動部隊二群が、それぞれ展開している。アルファベットの「Y」を、左に倒したような陣形だ。

ＴＦ58の各任務群のうち、最後尾に位置するＴＧ58・2と敵機動部隊の距離は、約二四〇浬。

航空攻撃が不可能な距離ではないが――。

「まだだ」

ミッチャーはかぶりを振った。

「日本艦隊と決着をつけるのは、艦上機の補充を終えてからだ」

今回のトラック進攻作戦――作戦名「満潮」で、ＴＦ58は一五隻の空母に九五〇機の艦上機を搭載して出撃した。

トラックの日本軍基地航空部隊と、日本軍の機動部隊を叩き、制空権、制海権を奪取した後、第五六任務部隊――第一、第四海兵師団を主力とする攻略部隊がトラック環礁の各島に上陸し、占領する手筈になっていた。

ＴＦ58は、その序盤戦で躓いた。

トラックの基地航空部隊との戦闘で、空中戦による被撃墜機二八二機、被弾損傷による喪失機二一一機の損害を受け、艦上機を半数以下に打ち減らされたのだ。

幸い、後方にはＴＦ56の護衛空母一六隻がいる。同部隊から艦上機と搭乗員の補充を受ければ、ＴＦ58はフル編制に近い状態に戻り、日本艦隊に対して優位に立てる。

補充作業の終了までは、極力敵に発見されぬよう努めると共に、敵艦隊との間に距離を置くとミッチャーは決めていた。

「惜しいですな。ジャップの機動部隊を一方的に叩ける好機を見送るのは」

ガーフィールド参謀長が、ミッチャーの隣で情報

ボードを見つめながら言った。いかにも口惜しい、と感じている口調だった。

「焦りは禁物だ、参謀長。艦上機の補充さえ受ければ、我が方が優位に立てるのだ。それが分かっていて、無理押しをする必要はあるまい」

諭すような口調で、ミッチャーは言った。

「ＴＦ56の護衛空母部隊は、本日未明にメジュロから出港した旨、報告が届いています」

作戦参謀のアルバート・ウェインブリッジ中佐が発言した。

護衛空母部隊の現在位置は、メジュロ環礁の西方九〇浬だ。

これに対し、ＴＦ58隷下の各任務群は、メジュロ環礁の西方九〇〇浬から一〇二〇浬の海域にいる。

護衛空母部隊の速力は一五ノット。ＴＦ58の速力は、巡航速度よりやや速い二〇ノットだ。

明日の夜明けまでには、双方の距離を二〇〇浬から三〇〇浬まで詰めることができ、艦上機の補充が可能となる。

今日の日没まで日本艦隊の攻撃をかわすことができれば、我が方が勝つ――と、ウェインブリッジは力を込めて言った。

「問題は、それが可能かどうか、です。日本軍の偵察機を、完璧に阻止し得るとの保証はありません」

航空参謀アレクサンダー・ラベル中佐の発言を受け、ミッチャーは言った。

「足止め策を講じてみよう」

4

「敵四発重爆大編隊、左三〇度、高度八〇（八〇〇〇メートル）！」

九時一三分（現地時間一〇時一三分）、第一機動艦隊旗艦「大和」の艦橋に、艦橋トップの射撃指揮所から報告が上げられた。

「索敵機の報告にあった奴だな？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。